

雪国の織物

十日町には、植物繊維や生糸の織物など、古くから多様な織物文化がある。特に、信濃川流域に多く生育する苧麻（ちよま）という草本植物から作られる軽やかな織物「越後ちぢみ」は有名だ。

十日町で織物が最初に盛んになった理由のひとつは、苧麻が採れることである。この地域で最も古い苧麻織物の記録は、およそ7,200～5,400年前の縄文時代前期から残されている。この荒く編まれた苧麻織物は越後アンギンと呼ばれるようになり、現在でも、より細かく編まれた越後上布とともに生産されている。

信濃川流域の気候条件は、この地域の織物文化の発展を支えた。苧麻は水が豊富な地域でよく育つ。湿度の高い地域も織物にとっては理想的だ。乾燥した空気は糸をもちろくするため、製織中に糸を引っ張ったりねじったりすると切れてしまう。一方、湿度は糸をしなやかで弾力性のあるものにする。

十日町では伝統的に、織物は冬に生産されていた。ほとんどすべての農家の女性が、苧麻やその他の植物繊維を使って自家製の布を作り、それを売って家計の足しにしていた。また、冬に作業することで、織り手は出来上がった布を雪ざらしと呼ばれる雪の上で養生し、黄ばみを落として白を鮮やかにし、染料をより鮮やかにすることができた。

十日町の家内工業で生産された越後縮や越後上布は、全国的に高く評価された。問屋は新潟の山間部から京都や大阪、江戸（現在の東京）に輸出し、高値で取引された。越後ちぢみは幕府役人の衣服にも使われた。

苧麻織物の需要は、19世紀には嗜好が絹織物へと移り、衰退していった。地元の織物業者は絹織物にも参入することを決めたが、絹織物は生産工程が複雑なため、専任の工房が必要だった。このため、製織の多くが個人の家庭から中央の工房へと移行した。また、他の絹織物産地では、職人が特定の工程に特化しているのに対し、十日町では多くの職人が全工程を習得している。

十日町の熟練した織り手たちは、明石ちぢみのような薄手で緯糸がしっかりと撚られた夏用の絹織物も開発した。この生地は、湿った肌に密着するのを防ぎ、風通しをよくして涼しく着ることができる。

十日町の織元は、代々受け継がれてきた伝統的な技法や柄をもとに、エレガントな着物を作り続けている。そして、現代の消費者にアピールできるような革新的な用途を模索し、彼らの技術が何世代にもわたって存続できるよう努力している。